

「リニア中央新幹線整備を地域振興に活かす伊那谷自治体会議」議事録

- 1 日 時 令和3年2月9日（火） 14:30～16:00
- 2 場 所 飯田合同庁舎 講堂（第3応接室とつないだウェブ会議）
- 3 出席者 【県】
（第3応接室）阿部知事、伊藤企画振興部長、林産業労働部長、
中村観光部長、野池専務理事（県観光機構）、田下建設部長、
中村リニア整備推進局長
（飯田合庁）佐藤上伊那地域振興局長、丹羽南信州地域振興局長、
米倉伊那建設事務所長、細川飯田建設事務所長、
中坪木曾地域振興局長（オブザーバー）
【市】佐藤飯田市長、白鳥伊那市長、伊藤駒ヶ根市長
【南信州広域連合】熊谷阿智村長
【上伊那広域連合】唐木南箕輪村長
【木曾広域連合】向井南木曾町長（オブザーバー）

4 発言要旨

（1）あいさつ

【阿部知事（座長）】

関係市町村長の皆様方には、大変お忙しい中ご参加いただき、感謝申し上げます。

伊那谷自治体会議で、関係市町村と皆様方と問題意識を共有して、地域一体となって取り組んでいくべく、これまで様々な検討を行ってきたところ。

前回、「リニアバレー構想実現プラン基本方針」を決定し、リニア開業に向けて、各機関が連携して取り組む課題、そして取組主体について一定の整理を行ったところ。また、そうした取組についても、後ほど報告させていただくが、引き続き関係機関と協力をしながら、このリニア中央新幹線の開業を伊那谷全体の発展に、そして長野県の発展にしっかり繋げていきたい。引き続きのご協力、そしてそれぞれのご尽力をお願い申し上げます。

本日は、佐藤市長が当選され初参加となり、JR飯田線との接続について、新しいご提案をしていただく予定。上下伊那にとって、大変重要な案件であり、しっかりと協議をする中で方向性を共有していきたい。

新型コロナウイルス感染症の影響で、地域間の交流がしづらい環境にあるが、県内においては、関係皆様のご尽力で、かなり落ち着く方向になってきている。しかしながら、緊急事態宣言が発出されている地域もあり、気を緩めることなくコロナ対策に当たっていき、コロナ後の地域社会のあり方をしっかり見据えながら、リニア中央新幹線を活かした地域づくりを皆さんと一緒に考え、そして実行していきたい。改めて一致団結して、このリニアを地域に活かしていくことを進めていきたいと思うので、そのご協力をお願いし、私からの冒頭の挨拶とさせていただきます。

(2) 協議事項

○JR飯田線乗換新駅について

【白鳥 伊那市長】

従来、新駅ということで私どもは聞いており、そうした考えに修正をかけるということの説明を受けた。今日も上伊那の首長が3名出席しており、そうした説明を今までしているため、今日の話を持ち帰って伝えるということになるかと思う。

ただ、私自身の考えとしては、時代、技術の変化に応じたやり方が一番良いと思う。

例えば、リニア長野県駅が一番求める機能というのは、リニアを利用した人がこちらに来る、そこから目的地に行くトランジットとしての機能が一番求められる。その時に車、バス、鉄道なのかと見ていくと、中央道が近くにあるため、車を一番利用すると思う。また、自動運転があと数年後にはできると思うので、そうしたものを使っていくことになると思う。

また、私たちがリニアを使う場合も、車がおそらく多くなると思う。利用者の視点に立てば、最終的に一番良い方法を選択していくことが重要。

【伊藤 駒ヶ根市長】

佐藤市長のご提案を受け止めた。一点考慮していただきたい点は、駒ヶ根市の商工関係者の中から、駒ヶ根というまちが駒ヶ根駅を中心として発展してきたという経緯があるということである。そのため、リニア時代になったとしても、この駅を中心としたまちというのは大事にしていき、この乗換新駅の設置を巡り、そうした状況を十分考慮していただきたいという提案をしてきた経緯がある。

時代の変化により、特にこれからの10年、どのような交通手段が主体になるのかというのは、見通せない状況。それぐらい技術進歩がこれから激しくなっていくため、固定的にものを考えるというのは避けた方が良いと思う。そうした経過もあり、飯田線とのアクセスは、新駅があろうが無かろうが、現在のインフラとして十分に活用していく必要がある。その上で、二次交通として最も優位なものは何かということ、ぜひご検討していただきたい。

二次交通の利用者層も、時間を優先するビジネス客や、そうした時間に捉われないゆったりとこの信州の自然を楽しみたいという層もあろうかと思う。それぞれの様々なニーズを考慮しながら、二次交通のあり方を検討していくことが大事。

【唐木 南箕輪村長】

ご提案について、提案は提案として受け止めていきたい。佐藤市長の提案というのは、もったもだと思う。

上伊那北部の飯田線利用は、時間をかなり要する地域である。したがって、飯田線を利用するのはなかなか難しい。二次交通は非常に必要であり、これからこういったものが出てくるのかというのは、時代の変化を加味しながら検討していくことが必要。

元々、請願駅であり、負担について、上伊那北部まで含めると大変難しい問題という

受け止め方をしている。飯田線を考えていくと通勤通学が主だが、観光要素を加味しながら、どのように走らせるかということも考えていく必要がある。リニアの利用者で仕事では車利用が多いと思うが、観光となれば飯田線が必要になってくるため、飯田線のあり方を含めて検討していく必要があると思う。

【熊谷 阿智村長】

南信州広域連合会議の中でも、このことについては、話し合いをし、このような方向性を出した経緯がある。話のあったように、やはり費用対効果という面も大きく、勾配があるというような物理的なこともある。飯田線を利用し、リニアに乗って行かれる方、また逆のパターンもある。バスを使った場合や、歩いて楽しみながら飯田線に乗るといった色々な方法を考えながら検討したら良いのではないかという意見も出て、このような比較検討のまとめを出させていただいたと思う。

阿智村は観光客が多く、中央道で車を使って来られる方がほとんどである。観光においては、世界一速いリニアに乗り、ゆっくりな飯田線に乗るのは、また一つの風情がある。そういった使われ方でゆっくり旅行を楽しんでいただくという観点から、いろいろなパターンを想定しながらやっていくのが良いのではないかということで意見もまとまっている。

【佐藤 飯田市長】

こうして皆様方から利用者目線に立ち、あるいは今後の時代の変化に応じてというお話をいただいた。

飯田市としては、来年度予算でリニア時代の二次交通のあり方について検討していく、そんな調査費も計上しようと思っているが、その中でこの伊那谷全体にリニアがどういう形で、どう繋がっていくのか、そんな二次交通のあり方を検討していく。その中で検討で、研究成果を皆様方にご報告しながら結論を得ていきたいと考えている。

【阿部知事（座長）】

各市町村長の皆様方からご意見いただき、基本的には佐藤市長からのご提案については、この自治体会議としては、理解をして受け止めるということだと思う。

長野県においては、広域二次交通の検討をするというのが県の大きな役割になっており、佐藤市長、飯田の皆さんと一緒に今後のあり方については考えていきたい。それから、佐藤市長からのお話にもあったように、飯田線との接続は引き続き重要な課題であると複数の首長からもそうした趣旨のご意見があったかと思う。

飯田線のあり方については、これまでは重要な課題ということで共有してきたので、引き続き接続のあり方、それから飯田線をどう活性化していくか、こうしたことについて一緒に検討を行っていきたい。

佐藤市長におかれては、今後の検討状況また継続的に、この自治体会議と共有していただくよう、お願い申し上げます。

(3) 報告事項

① リニアバレー構想実現プラン基本方針に基づく取組の進捗状況について

【白鳥 伊那市長】

(景観形成)

とても大事な取組。木曾地域では十数年前から始まっており、見た目も非常に良い。近似値かと思うサインシステムなので、伊那谷地域と木曾地域で一緒にやっていくべきだと思う。

上伊那では大型農道の看板を撤去しながら、三風モデル看板に取り替えている。同時に高遠町でも看板の取り替えを進めており、駒ヶ根市も駒ヶ根インター前の看板を替えたりといった動きが始まっているので、ぜひ進めてもらうようお願いする。

山岳のサインシステムも同様で、中央アルプス、南アルプスに2つのナショナルパークがあるので、老朽化して看板を替える時には、一つの統一モデルにするよう考えるべき。特に南アルプスは長野県、観光庁、山梨・静岡に関わる自治体で考えて作ったモデルがある。こうしたことは中央アルプスでも一部始まっているが、統一感のある看板の設置が望ましいと思う。

(広域二次交通)

資料のとおりだと思う。Ma a Sについては、JR東日本で取組が進んでいるが、東海は若干遅れている。鉄道を主体としたMa a Sの構築が重要。特に飛行機、バス、タクシーや宿泊・飲食も含めて一括で利用できるMa a S、キャッシュレスがこれから必須になるので、ぜひ進めていくべき。

(キャリア教育)

大事な取組だと思う。

(広域観光)

かなり大胆な戦略を立てて吟味していかないとまずい。現在は、従来の温泉、神社仏閣・名所巡りのような観光スタイルから完全に変わっている。インバウンドを含めて長野県なら山岳高原観光や自転車。伊那谷は自転車が盛んで、飯田では始まっているので、自転車を伊那谷、木曾谷を含めて展開するとか。滞在型農業や林業等、今までにないものを準備すべき。

特に三遠南信自動車道ができれば、240万人余が暮らす三遠南信地域が結ばれ、多くの人が長野県の遠山郷に入ってくる。今の状態では受け入れは無理。来た時にそこで完結しないで、伊那谷や木曾谷、県全体に誘導できるよう戦略を立てるべき。そのために今から準備しないといけない。

現状、伊那谷・木曾谷にDMO等の組織が多くある。「伊那路・木曾路広域観光連携会議」が両方を包含した形で存在しているが、実態はパンフレットの作成だけ。「伊那路観光連盟」も旅の手帖を作るだけ。伊那谷地域には長野伊那谷観光局DMOや南信州観光公社、伊南DMOなど観光に関わる組織がたくさんあるので、分かりやすい組織に

まとめた方がいいと思う。

一つの案としては、伊那路・木曾路の会議は戦略を立て、あるいは取組の推進母体としてやっていく、その下に伊那谷のDMO等が個々の取組を進めながら常に連携してやっていく。さらに木曾、伊那、高山の国道 361 号を使った組織もあるので、個々の地域で自分のところに誘導する戦略を取りたいのは分かるが、補完的な視点で広域観光を捉えていく。その上には長野県観光機構があるので、長野県全体、中部圏全体も見据えてダイナミックな動きができるよう戦略を提案したり足並みを揃えていく点で、観光に関わる組織の大胆な見直しが急務。

さらに踏み込んで言えば、伊南DMOをやめて伊那谷DMOに一本化するとか。極論に近いが、そのくらいの思いで組織を再編しながら、来たるリニア・三遠南信自動車道の開通に向けた観光戦略を立てていくのがいい。

(企業立地)

なぜ外国系企業を求めるのか分からない。上伊那では企業誘致に非常に力を入れており、現在交渉中の企業が5、6社ある。こうした企業が誘致できると雇用が生まれたりするが、一方で地元企業を伸ばしていくことも大事。皆さんどうしても海外の労働力が安いという理由でそちらに進出してしまい、雇用がなくなる例も経験した。地元企業の誘致も大事。国内の企業は動きが始まっているので、実例を伴う誘致の方が外国企業をターゲットにするより結果が出やすいのではないかな。

【林 産業労働部長】

国内企業のみならずという前提で、伊那谷の立地環境の魅力を活かした誘致活動が大切だと思っている。伊那谷の自然と共生しながら製作活動を行う、こうした活動に共感してもらえるような外国企業の誘致、あるいは観光施設、研究所等へのアプローチをしていくよう掲げた目標。また、地元企業を伸ばすことも重要。今後、産業支援機関を充実させ、企業活動を支援していく。

【伊藤 駒ヶ根市長】

(企業立地)

資料の内容はコロナ前の計画だと思う。現状、企業の本社・中枢機能が必要なのが問われている時代に、それを誘致しようというのは時代に合わない。むしろ働く人それぞれのニーズに沿った移住や交流施策に力を入れていくのがこれからの時代。伊那谷に足りない通信環境の整備に力を入れて、誰もがどこでも働ける環境をつくるのがこれからの産業のインフラになる。成長期待分野で企業にアプローチするのではなく、仕事や環境、暮らしの整備に力点を置くのがリニア時代のインフラ整備。プロモーションはありがたいが、その前にそうしたインフラ整備に支援いただきたい。

【佐藤 飯田市長】

(企業立地)

資料の中長期的な取組に生活環境の充実、サテライトオフィス、リモートオフィス等

も入っているが、それがコロナ禍、アフターコロナに向けてのニーズだと思う。その前提となる通信環境の強化について、県としても前倒しで実施していただきたい。

(広域観光)

伊那市長のお話にあった山岳のサインシステム、遠山郷の観光拠点づくりを飯田市としてもしっかり取り組んでいく。県とも連携してやっていきたい。

【阿部知事（座長）】

様々なご意見をいただいたので、議論を深めたい。

(景観形成)

上伊那、木曾地域のすばらしい取組を南信州も含めて推進してくれればありがたい。県の立場からすると、リニアを契機に景観形成を進めていければいいと思う。他圏域にも効果を波及させられるようにしたい。

(広域二次交通)

M a a Sの話は勉強のためだけの会ではなく、どう具現化するか観点でしっかりした場をつくることが大切。

また、高速バスを運行するにしてもどういうイメージなのか、首長の皆さんへ、早めにある程度のイメージ合わせをしてほしい。

(キャリア教育、広域観光、企業立地)

それぞれ違うテーマではあるが、全体的なビジョンの中でやっていかないといけないテーマが、何となく縦割りで走り始めてしまっている。キャリア教育も上伊那、南信州でそれぞれ行われているが、キャリア教育そのものを勉強しようという話ではなく、リニア開業時に利便性が高まることによって、定住人口の減少が心配されるということで、定住人口の維持、人材定着が基本だと思う。

そうした観点で、広域観光も単純な観光ではなく、アフターコロナを見据えて変えていかないといけないが、少し大人しめの検討になりすぎてしまっている。

体制についても、広域観光の話は総論賛成なのに各論になると個々の地域でとちがちだと思う。ぜひそういうことがないように、しっかりした体制の整備、問題意識を共有して進めていかないといけない。

県もリゾートテレワーク、ワーケーションを進めているし、今回の当初予算案ではデュアルワークをする人材を活用しようという方針を出している。大都市と近くなればなるほど柔軟な働き方、暮らし方ができる。観光と暮らし方、生き方はかなり近い概念になってくるので、そうした観点も入れていかないといけない。

企業のあり方もアフターコロナで変わってきているので、しっかり見直しをしていかないと、コロナ前の古いモデルの企業誘致になりかねない。伊那谷をどういう居住地域にしていくか、あるいはどういう産業を伸ばしていくのか、もう少し長期的なビジョンを持って考えていく必要がある。中長期的な取組も当たり前といえば当たり前。せっかく各市町村長と私が参加しているので、それぞれの事務局、各部局でも大胆な投げか

けをしてもらわないと、アフターコロナやリニア時代には合致しない。

そういう意味で、もう一段、今日のご意見を踏まえ、さらに踏み込むところ、あるいはエッジを利かせるところをしっかりと作り込んで、さらに検討していくことが必要。

【丹羽 南信州地域振興局長】

資料2（リニアバレー構想実現プラン基本方針）に掲げられている15項目の様々な取組がつながっていくように紐づけし、広い意味で検討を進めていく。

【伊藤 駒ヶ根市長】

大胆な戦略が必要。リニアバレー構想実現プラン基本方針の15項目はいいが、優先順位をつけて取り組んでいかないといけない。企業誘致であれば、本社・中枢機能というよりもインフラ、暮らし方の整備の方が重要だと思うし、地元の人材育成も産業基盤につながる。高校再編の議論もあるが、スーパースクール、地域密着型の教育など特色を持ったものを打ち出していないと、この地方は生き残っていけない。幅広い検討をするのではなくて、優先順位をつけて深掘りしていく手法で取り組んでほしい。

【白鳥 伊那市長】

広域観光は、組織の見直しにあたり3地域の広域連合等の事務担当が集まって案をつくってもらい、明日からでも取り組んでほしいのでお願いします。

【丹羽 南信州地域振興局長】

各地域の推進体制を明確にしていくよう、地域振興局がコーディネートして進めていく。

【中村 観光部長】

南信州、伊那、木曾含めて、リニアに向けて観光機構も一体で旅行商品をつくっているが、大きな組織で検討することも大事。これから、長期に滞在してもらう、リピーターを増やす、暮らしと観光、働き方と観光について、どのようにお金を落としてもらうか各地域のDMOで考えることが大事。そのつなぎ役、コーディネートについて観光機構を中心にやっていく。来年度予算にも盛り込んでいるのでしっかりやっていく。

【丹羽 南信州地域振興局長】

広域観光は、観光機構が大きなウェイトを占めることになる。よろしくお願いします。

【佐藤 飯田市長】

キャンプやサイクルツーリズム等、具体的なテーマとともに組織を考えるのがいい。実務と組織を並行してやっていくのがいい。組織論だけでは停滞する。

【熊谷 阿智村長】

私も伊那市長と同じことを考えていた。そうしたコーディネートをしてくれて、伊那谷を全国プロモーションにつなげられるような組織の再編に早期に着手してほしい。

昼神温泉はコロナで大打撃だが、山に来る人は、たき火などで冬でも一定数いるので、

山というものに力を入れてもらえるような政策をお願いします。川も大人気なので、こうしたことを全国に発信できたらと思う。阿智を拠点に駒ヶ岳、上高地、善光寺などにレンタカーで動く人は多い。伊那谷を拠点に信州2泊3日の周遊ルートができるといい。現場としても頑張ってやっていく。

【阿部知事（座長）】

観光の体制は、皆さんと一緒に具体化していきたい。HAKUBA VALLEY TOURISMは「白馬」という名前が前面に出てくるが、世界に広める名前として大町市長にも理解していただき使っている。地域の利害が表に出すぎるとうまくいかないのでは、リニアの地域振興に関しても、市町村の皆さんに協力をお願いしたい。

広域的に取り組むことは、世界、全国に向けた発信だと思う。山と川の雄大さからすれば、他地域に比べてダントツで伊那谷、木曾谷に優位性があると思っているが、残念ながらそのイメージが一体的に打ち出せていないと感じる。

そういう意味で、本日の議論を具体的な動きにつなげていくことが大切。県もしっかり取り組んでいくが、皆さんにも協力いただきたいのでよろしくお願いします。

【向井 南木曾町長】

伊那谷の大きな枠組み、流れの中に木曾も入れてもらってありがたい。高山や中津川も含めた流れ、連携を構築していただけるとありがたい。

【丹羽 南信州地域振興局長】

今回はリニアバレー構想実現プラン基本方針のうち、喫緊に取り組む6項目について報告させていただいたが、アフターコロナを見据えて、新しい目で見直した上で自治体会議に相談したいと考えている。市町村の皆様にも主体的に取り組んでいただく形になるので、ご協力をお願いしたい。

②リニア駅周辺整備の検討状況について

意見なし

◆知事（座長）総括

リニア駅と飯田線の接続については、佐藤市長からの提案を受け止める。今後も引き続き、検討状況を報告いただきたい。

基本方針について、コロナ禍で世の中のあり方、暮らし方、働き方の変化が加速化している。そういう意味で、リニアバレー構想の内容についても、アフターコロナを見据え、見直すところがあるのかを検討しなければいけないと思う。

観光や産業立地等は、目指す方向性をしっかり共有した上で、具体的な取組を進めていかなければいけない。本日の意見交換を通じて、前向きに取り組むべき課題が見えてきた。県もしっかり対応していくので、地域、市町村の皆さんにおいても引き続き協力をお願いしたい。

コロナの対応において、多くの人の命と健康を守る取組、産業や暮らしを守る取組を

市町村の皆様方と一緒に進めているが、政策を進める上では、多くの皆さんと目的を
しっかり共有することが大事と改めて感じた。

そういう意味で、リニアバレー構想を具体化していく中でも、何となく観光、産業を
振興しようというのではなく、目的意識を明確にし、共有した上で進めていくことが重
要。本日いただいたご意見を踏まえて具体的な検討を行っていきたい。次回はリモート
ではなく、対面で意見交換を行いたいと思うのでよろしく願います。

(以上)